

むか　さ　じょう　あと

# 史跡 穀佐城跡

穀佐城跡保存整備に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書(Ⅲ)



2008

宮崎市教育委員会

未訂正

正 誤 表

訂正箇所	誤	正
2ページ2、3行目	上新城遺跡	三万田遺跡

【お詫び】本書に上記のような誤りがありましたので「正誤表」にて訂正いたします。

## 序

国指定史跡穆佐城跡は、南北朝時代から約280年近い期間存続した山城で、南九州の中世史を語る上で重要な位置を占めています。特に、南北朝時代には北朝方の九州の拠点的存在となり、幾たびとなく戦場の舞台になったところです。

旧高岡町では平成8年度に「穆佐城跡保存整備基本計画」を策定し、歴史的な公園整備を進めてきました。平成14年3月には国史跡としての指定を受け、平成15年度からは「穆佐城跡保存整備事業」として、保存整備計画の見直しを行い、併せて発掘調査を実施しました。

平成18年1月の合併により宮崎市となり、旧高岡町の事業を引き継ぐために、「穆佐城跡保存整備専門委員会」を設置して、それに基づいた発掘調査を実施し、穆佐城跡保存整備事業を推進しているところです。

今後もこのような発掘調査を継続的に行い、穆佐城の歴史を解明しながら、市民の皆様に親しまれる史跡整備を進めてまいりたいと考えています。また、今回の報告書が中世史研究の一助となり、広く活用されますことを願っています。

最後に、発掘調査にあたりご協力いただきました関係機関の皆様、ご指導、ご教示をいただきました諸先生方、発掘調査に従事された作業員の皆様など、関係者の皆様に心より厚くお礼申し上げます。

平成20年3月

宮崎市教育委員会

教育長 田原 健二

## 例　　言

1. 本書は、平成 18 年度、平成 19 年度に実施した国指定史跡「穆佐城跡」の保存整備事業に伴う発掘調査と、法面修復工事の概要報告書である。
2. 発掘調査は宮崎市教育委員会が、文化庁、宮崎県教育委員会の援助を受けて実施した。  
調査期間　平成 18 年度発掘調査：平成 19 年 3 月 12 日～平成 19 年 3 月 29 日  
平成 19 年度発掘調査：平成 19 年 10 月 9 日～平成 20 年 3 月 18 日
3. 発掘調査により出土した遺物及び調査における図面、写真等は宮崎市教育委員会で保管している。
4. 調査組織  
調査主体　　宮崎市教育委員会  
(18 年度)  
文化振興課　課長　野田　清孝  
文化財係　主幹兼係長　山田　典嗣  
調査事務　主任主事　鳥枝　誠  
調査員　主査　島田　正浩  
  
(19 年度)  
文化振興課　課長　野田　清孝  
文化財係　主幹兼係長　山田　典嗣  
調査事務　主任主事　吉永　大介  
調査員　技師　石村　友規
5. 現地における空中写真撮影は、有限会社スカイサーバイ九州に委託した。
6. 掲載した図面の実測・製図・図版の作成は石村が行った。また現地における実測作業の一部は金丸武司（宮崎市教育委員会）の援助を得た。
7. 発掘調査現場の写真撮影は島田・石村が行った。
8. 附章の執筆は今城正広（宮崎市教育委員会）が、その他の執筆、編集は石村が行った。
9. 紙幅の都合上、参考文献は省略させて頂いた。
10. 現地調査において宮崎市立穆佐小学校、麓公民館を始め関係者各位のご協力を得た。  
また以下のの方々からご教示、ご指導を賜った。（順不同、敬称略）  
千田嘉博（奈良大学）、市原富士夫（文化庁）、谷口義信（元宮崎大学）、伊藤哲（宮崎大学）吉本正典（宮崎県文化財課）、福田泰典（宮崎県埋蔵文化財センター）

## 目次

### 第Ⅰ章 はじめに

1 調査に至る経緯	1
2 遺跡の立地と環境	1
3 穂佐城の概要	2
4 現状の調査	3

### 第Ⅱ章 調査区の設定と調査の概要

1 調査位置と目的	3
2 基本層序	5
3 調査の概要	6

### 第Ⅲ章 調査成果

第Ⅳ章 総括	11
写真図版	12
附章 法面保存修復工事	14

## 指図目次

第 1 図 穂佐城跡周辺遺跡分布図	1
第 2 図 穂佐城跡縄張図	2
第 3 図 穂佐城跡地形測量図	4
第 4 図 曲輪 20 発掘調査区位置図	5
第 5 図 曲輪 20 土層堆積基本層序模式図	5
第 6 図 曲輪 20 調査区全体図	8
第 7 図 堀上層断面図	9

## 表目次

### 第1表 既往発掘調査一覧

3
---

## 写真図版

### 図版 1

1. 1 トレンチ全景
2. 1 トレンチ上層堆積状況
3. 1 トレンチ土坑 1-6
4. 1 トレンチ炉跡
5. 1 トレンチ廻土層堆積状況
6. 2 トレンチ全景

### 図版 2

1. 2 トレンチ曲輪内段
2. 2 トレンチ土坑 2-3・2-4
3. 2 トレンチ造成上面下遺物出土状況
4. 3 トレンチ全景
5. 3 トレンチ土坑 3-10
6. 3 トレンチ石込ビット

### 図版 3

1. アンカーノの打設作業 (鉄筋補強工)
2. 補強土吹付作業 (連続織維補強土工)
3. 植生基材吹付作業 (植生工)
4. ジオファイバー工完成状況

## 第Ⅰ章 はじめに

### 1 調査に至る経緯

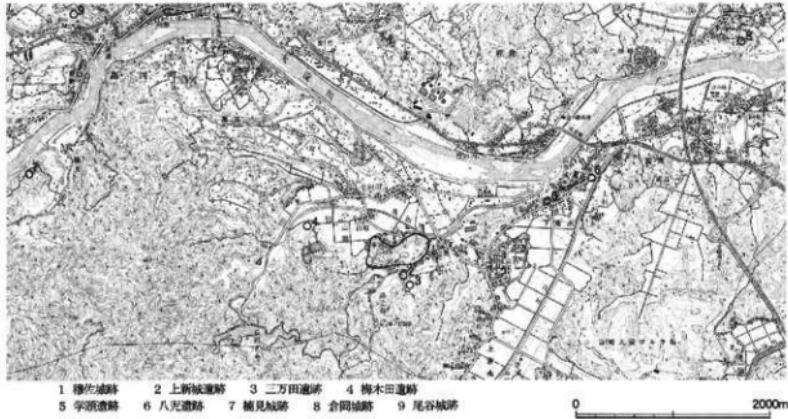
穆佐城は宮崎の中世を代表する城郭として広く知られていたが、曲輪の配置や構造など不明な点が多くあった。その解明の契機となったのが、平成2年度に千田嘉博氏（現奈良大学准教授）を招聘し作成した縄張図である。その後、平成10年まで6回に渡り確認調査が実施された。

平成8年に穆佐城跡保存整備基本計画が策定され、平成10年4月には地元住民や地権者の協力もあり高岡町（現宮崎市高岡町）指定史跡となった。さらに平成13年7月には「穆佐城跡」の国指定史跡の申請を行い、翌平成14年3月19日に国指定史跡に指定された。それを受け、平成15年度から継続的に保存整備を実施することになり、また平成8年度に策定された穆佐城跡保存整備基本計画を見直し、内容を補足する目的で検討委員会を招集し、『穆佐城跡保存整備基本計画』を作成した。また並行して保存整備を目的とする発掘調査を行った。発掘調査は過去の調査が城域の東半部に限られていたため、西半部の状況を明らかにし、城館全体の概要を把握した上で、整備の中心となる地区を対象に発掘調査を進めることになった。そのため平成16年度も継続して西半部の調査を行い、資料の拡充を図った。

その後、平成18年1月に高岡町は宮崎市と合併し、新たに穆佐城保存整備専門委員会を招集、具体的に今後の保存整備計画の検討を行った。

### 2 遺跡の立地と環境（第1図）

穆佐城は宮崎市高岡町小山田に位置し、大淀川の支流である瓜田川の右岸に所在する西から東へ舌状に伸びる丘陵上に立地する。丘陵の北側は瓜田川が東流し、西側では丘陵が標高100m以上の山々へ連なり、南、東側には麓川が流れ自然の要害となっている。また周囲の水田と



第1図 穆佐城跡周辺遺跡分布図

の比高差は45m前後と大きな値ではないが、その斜面は一部を除いて急峻であり充分な防御機能を有している。

穆佐城周辺の中世の遺跡としては、大淀川沿いに小規模な山城が点在しており、10箇所以上（文献では18箇所）が確認されている。生産遺跡としては、丘陵南側の低地に立地する三万田

遺跡、上新城遺跡、丘陵北側の低地に立地する梅木田遺跡で水田遺構が検出されている。これらは穆佐城存続時期にも営まれており、穆佐城を支える生産域であったと考えられる。また上新城遺跡においては、穆佐城開城以前である古代（9世紀後半から10世紀前半）の大溝による方形区画が確認されている。区画内の遺構と出土遺物の検討から、この区画内の居館の存在は否定されているが、隣接する位置に相当する施設があった可能性が示唆されている。穆佐城の前身を考える上で重要な遺構である。

### 3 穆佐城の概要（第2図）

#### 穆佐城の歴史

穆佐城が最初に文献資料に現れるのは南北朝期の建武3年（1336）の『旧記雜錄』建武3年2月7日「土持宣栄軍忠状」であり当時は足利氏の所領であった。その後島山氏の居城となり、中央において観応の擾乱が起こると、日向国も抗争が表面化し穆佐城も争乱の舞台となった。

室町時代の応永10年（1403）には島津久豊が穆佐城に入り、その後は久豊の息子であり、穆佐城で誕生したとされる島津忠國の居城となるが、文安2年（1445）9月、土持氏と共に侵攻した伊東祐庵によって陥落、以後約130年間、穆佐城は伊東氏の支配下となった。

織豊期になり、天正5年（1577）に伊東氏が豊後国に退去すると、穆佐城は再び島津氏の支配下となった。近世になると穆佐は薩摩藩の外城（郷）の一つとなり、城郭としての役目を終え、支配の拠点は麓に移った。



#### 穆佐城の地形

穆佐城の城域は大規模な堀切によって4つに区分できる。北東部に位置するA地区は、小規模な曲輪と堀切から構成される。その南西に接するB地区は、主郭と想定される曲輪7が存在する曲輪群で穆佐城の中心と考えられる。B地区は曲輪を1mから5mの段差によって区画し、最上部に位置する曲輪7と、北隣に1段低く接する曲輪8は、堀切に対して大規模な土塁が巡らされている。さらに大規模な堀切を挟んでB地区の西側に位置するC地区は、B地区と同様に曲輪が段差によって区画され、穆佐城の中で個々の曲輪の面積が最も広い。C地区の北西に位置するD地区は、一つの広い曲輪内に横堀を巡らせている。穆佐城は、この4つの曲輪群の一つ一つが大規模な曲輪として捉えられることから、大規模な堀切と広い曲輪で構成されるこ

とを形状から見た特徴とする南九州の城郭の一例であると言える。

#### 4 既往の調査（第1表）

発掘調査は、平成2年に作成した縄張図の成果を基に過去に8回（1～8次）実施している。1次から6次調査は城郭の東半部、A地区とB地区において実施した。

1次調査は曲輪21で盛土造成による平坦部の造作を確認した。2次調査では、主郭に隣接する曲輪10において柱穴等が検出され、14世紀～16世紀末の貿易陶磁器も出土している。3次調査は堀切の状況確認を目的にA地区とB地区間にある堀切Iの調査を行った。4次調査は曲輪28の通路状遺構と想定される土坑において階段状遺構を確認した。5次調査では曲輪5において多数のビット、溝を検出した。6次調査は曲輪10において虎口を、曲輪17において盛土造成による平坦部の造作を確認した。

平成15年度からは保存整備を目的に発掘調査を実施している。7次調査、8次調査は未調査であったC、D地区の状況を確認する目的で行った。7次調査はC地区にある曲輪23を対象とし、土坑、虎口を検出した。8次調査はC地区の曲輪22、23、24、26、D地区の曲輪27を対象とした。曲輪23においては7次調査で確認された虎口の続きを、曲輪27では、曲輪内の段差を検出した。

	調査期日	調査位置	遺構等	遺物	遺物時期
1次	平成3年1月	曲輪21	ビット・盛土造成	土師器・輸入陶磁器外	14～16C末
2次	平成4年2月	曲輪1・2・10	曲輪1・2 遺構なし 曲輪10 ビット・溝	土師器・輸入陶磁器外	14～16C末
3次	平成5年1月	堀切I	なし	土師器・輸入陶磁器外	
4次	平成6年1月	曲輪28	ビット・階段状遺構	土師器外	
5次	平成6年4月	曲輪5	ビット・溝	土師器・輸入陶磁器外	15～16C
6次	平成10年3月	曲輪14・17	曲輪14 ビット・硬化面 曲輪17 盛土造成	土師器・瀬戸鉢・輸入陶磁器外 土師器・輸入陶磁器外	15C
7次	平成16年1月	曲輪23	虎口・硬化面・土坑	備前焼窯	16C
8次	平成16年10月	曲輪22・23・24・ 26・27	曲輪23 虎口・十坑 曲輪24 ビット 曲輪27 段	土師器・近世海陸 白磁(攢品)	15C

第1表 既往発掘調査一覧

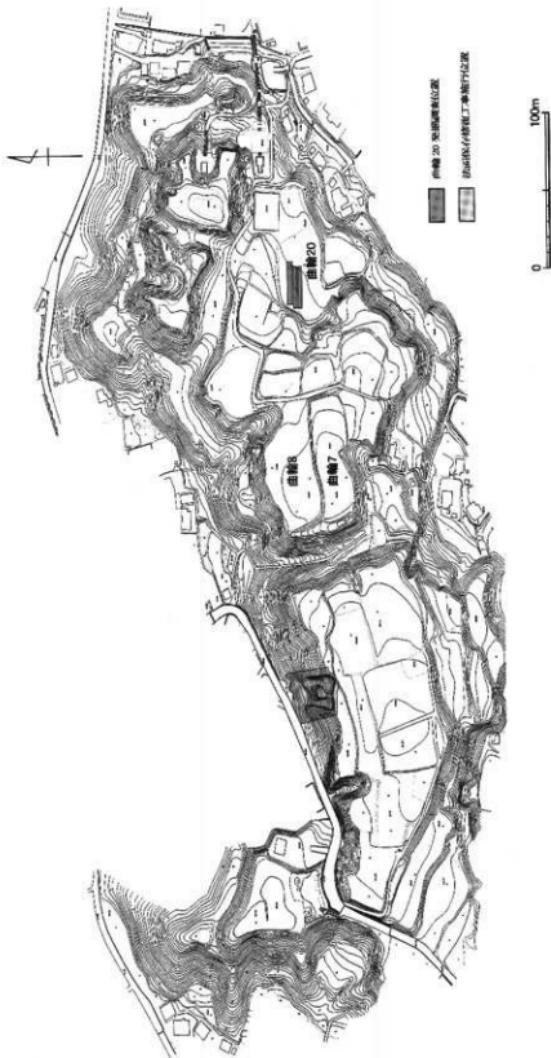
## 第II章 調査区の設定と調査の概要

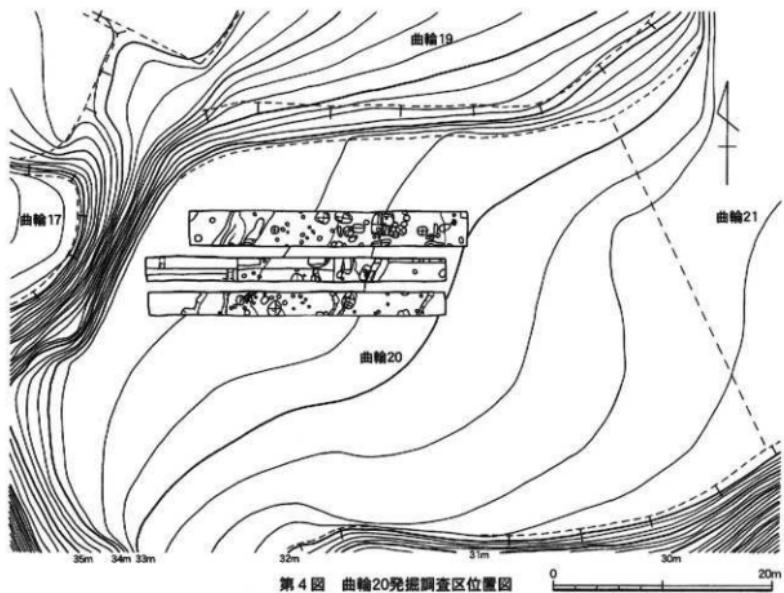
### 1 調査位置と目的（第4図）

調査対象とした曲輪20は、穆佐城を4地区に区分した場合、主郭が存在する中心曲輪群と考えられるB地区に所在する。曲輪内には「島津忠国御誕生杉」が存在することから、9代当主島津忠国が生まれた（15世紀初頭）場所とされる「坪ノ城」に推定されている。穆佐城の中でも初期段階であるこの時期の遺構を整備することを目的とし、その具体的な内容を把握するために発掘調査を実施した。

平成18年度は、基本的な土層堆積状況、遺構の分布、残存状況を確認するために東西方向に長軸をもつトレンチを設定し、19年度はその調査結果を基にトレンチの拡張を行うという方針で調査を進めた。

第3圖 標註城牆地形測量圖及U形牆調查・工事施工位置圖

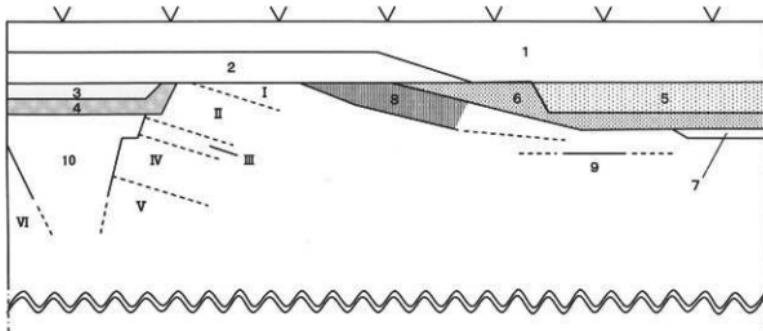




第4図 曲輪20発掘調査区位置図

## 2 基本層序（第5図）

曲輪20の土層堆積状況は、東西方向で大きく異なり、自然堆積が確認される部分はトレンチ西側部分のみである。また造成土に関してはトレンチの西、中央、東でそれぞれ大きく異なっている。その基本層序を以下で示すが、この層序は曲輪20に限定されるものであり、穆佐城跡全体を網羅するものではない。また土色に関しては、模式図ということで人間の視覚のみによる大系統的な名称を与えていたため、土色帳を用いて細分した土層断面図の土色とは必ずしも一致しない。



第5図 曲輪20土層堆積基本層序模式図

## 自然堆積

- I層：二次堆積アカホヤ層で厚さは0.3m程度で締まりは弱い。トレンチ西側でのみ検出された。土坑1-6の壁面でも確認されており東に向かって下降傾斜している。
- II層：黒色ローム層で縄文時代早期に相当する層で厚さは0.25m程度である。やはりトレンチ西側でのみ検出され、土坑1-6の壁、床面でも確認される。
- III層：黒褐色ローム層で厚さは約0.15mである。
- IV層：黄褐色ローム層で小林軽石を含む。
- V層：始良Tn火山灰層。
- VI層：始良入戸火砕流（シラス）層。曲輪20で確認されたものは白色を呈する。

## 人為堆積

- 1層：表土。
- 2層：現代造成土で、表土と色調、質感共に類似する。
- 3層：造成土。灰色を呈し、中世から近世の遺物を含む。
- 4層：黄灰褐色土。黒色ローム、シラスブロックが混ざり、中世から近世の遺物を包含する。
- 5層：シラスを主体とする造成土で、風化したアカホヤも一部西よりにおいて混ざる。トレンチの東側のみに存在し遺物は含まない。中世の遺物を包含する遺構が形成される。
- 6層：灰褐色土。古代から中世の遺物を包含する。トレンチの中央では2層下で検出されるが、東側では5層下で検出される。トレンチ西側には存在しない。中世遺物を含む遺構が形成される。
- 7層：茶褐色土。シラスが主体で炭化物、中世遺物を含む。トレンチ西側には存在しない。
- 8層：黒褐色土。5mm程度のバミスを含む。古代から中世の遺物を包含し、中世の遺物を含む遺構が形成される。トレンチ西側には存在しない。
- 9層：暗褐色土。少量の土師質の遺物を含む。トレンチ西側では確認されない。
- 10層：堀埋土。シルト質の褐色土と白色シラスの互層。

曲輪20は穆佐城が開城する以前は西から東に向かって下降傾斜する地形であったが、西側を削平、東側を盛土造成し平坦面を形成、生活面として活用していたと考えられる。これらの層で中世の遺構面と考えられるのは、5、6、8層上面となり、各々が穆佐城存続時期の生活面となる。また自然堆積層のI、II層一部は生活面として使用されたため中世の遺構が存在する。

## 3 調査の概要

### 平成18年度（第9次）調査

現地における調査は、まず調査区の設定と基準杭の設置、水準点の移動を行った。調査区は2m(一部1m)×25mのトレンチを曲輪の西寄りに設定した。この調査は遺構の分布状況を確認し、19年度調査に繋げることを目的とした。調査の結果、土坑、ピット、溝、硬化面が検出され、3面の遺構面も確認したが、各遺構面の時期を確認するまでには至らなかった。また、第1遺構検出面が明らかな造成土であり、さらにトレンチの西、中央、東がそれぞれ異なる土質であったため、その造成土の関係や各造成土の時期も次年度への課題となつた。

### 平成19年度（第10次）調査

平成19年度の調査は、前年度の結果を受け、第1遺構検出面の遺構の時期と、第1遺構検出面である、東西の造成土の時期を確定することをから開始した。

まず両造成土上の遺構を半裁し、遺構の時期を確認する作業を行った。その結果、土師器片、青磁片など中世遺物を含むピットなどの遺構が確認された。

次に造成土の広がりを確認するため、既往トレンチ（以下1トレンチ）から1m距離を開け、南側に平行する形で2トレンチを設定した。土の堆積状況は1トレンチと同様であり、造成は曲輪の広範囲に広がっていることが想定された。

造成範囲の広がりが確認できたため、9次調査時に深堀のサブトレンチを設定していた1トレンチにサブトレンチを設定し造成土を掘り下げた。西側の造成土からは、近世段階の磁器片等が出土し、造成が近世以降であることが確認された。一方、東側の造成土からは遺物が出土せず、造成の時期は明らかにできなかった。東造成土の下層では灰褐色土が検出された。これは両トレンチの中央付近において現代造成土直下で確認される土層と同一層と判断され、東側の造成が行われる前は、曲輪内に段差が存在したことが明らかとなった。この灰褐色土上面においてもピットや土坑が検出された。さらに、この灰褐色土層の時期を確認するため、18年度の調査において硬化面が確認されていた黒褐色土面まで掘り下げた。灰褐色土内からは、土師器皿、壺、青磁、白磁、備前焼の破片、鉄滓などが出土し、穆佐城期であることを確認した。

東側造成土下層に関しては、穆佐城期であることが確認できたが、造成土の時期が未だ未確定であったため、2トレンチに関しても造成土を掘り下げることにした。その結果、造成土そのものからは時期を確定するような遺物は出土しなかったが、造成土直下、灰褐色土上面から土師器皿、土師器壺、須恵器壺が完形やそれに近い形でまとまって出土した。この土器群の出土状況から、土器が廃棄されて大きく時間を隔てない時期に造成が行われた可能性が高く、その時期は時間幅を有しているものの15世紀代と想定される。

造成土の時期が確認されたため、造成が北側にどのように広がるかを確認するために1トレンチの北側に3トレンチを設定した。3トレンチは東側造成土が中世段階のものである可能性が高くなつたため、造成土面までの調査に止めた。造成土の広がりは他と同様であった。

また1トレンチにおいて、西側の旧地形を確認するサブトレンチを設定し掘り下げたところ、曲輪の西端において堀を検出した。なお堀は想定以上に深く、サブトレンチでの調査は危険が伴うため、途中で掘り下げを中止したことから底面の検出には至っていない。

### 第Ⅲ章 調査成果 一各トレンチの主要遺構一

#### 20-1 トレンチ

1トレンチは、3本のトレンチの中で最も下層まで調査を行った。遺構は、造成土面、灰褐色土面、黒褐色土面の3面で確認されている。造成土面において土坑、ピットが検出されるが、ピットに規則性は確認されない。灰褐色土面のピットは明瞭な柱痕が検出されるものがあるが、検出数は少なく掘立柱建物のプランが明確に確認されるものはない。

**土坑1-6** トレンチのほぼ中央において灰褐色土面で検出される。平面形は一部がトレンチ壁にかかるため不明であるが、楕円形もしくは隅丸長方形になると思われる。短軸幅は約1.2m、深さは約1.7mを測る。床面は自然堆積の黒色ローム層に達している。遺物は土師器皿や壺、管状土縫、棒状鉄製品が出土している。土師器は細片が多い。土坑の上層は厚さ6cmほどの均一なシラス主体の土で構成されており、廃棄時に一気に埋め戻され、シラス主体の土によって「封」をされた可能性もある。

**炉跡** トレンチの中央東寄りにおいて黒褐色土面上で検出された。構造は黒褐色土に10cm程度の掘り込みを設け、そこに白色、黒色、灰色、褐色の粘土が斑文状に混ざったものを貼り付けている。被熱部分は平面形が長方形を呈し、一部が硬化している。長軸約1.5m、短軸約0.8mを測り、長辺の一方側で掘り込みと礫を検出した。礫は一部を除いて原位置を保っておらず内側に崩壊しているものと見られ、本来は掘り込みの縁に沿って配置されていたものと考えられる。被熱部分の周囲にも粘土は広がっているが形状は不定形である。周辺から鉄滓や炭化物が出土しており、鍛冶関連遺構も想定したが、遺構そのものから鉄滓や微小金属片などが出土していないためその可能性は低い。知覧城など南九州城郭で確認されている「かまど」としての利用が考えられる。

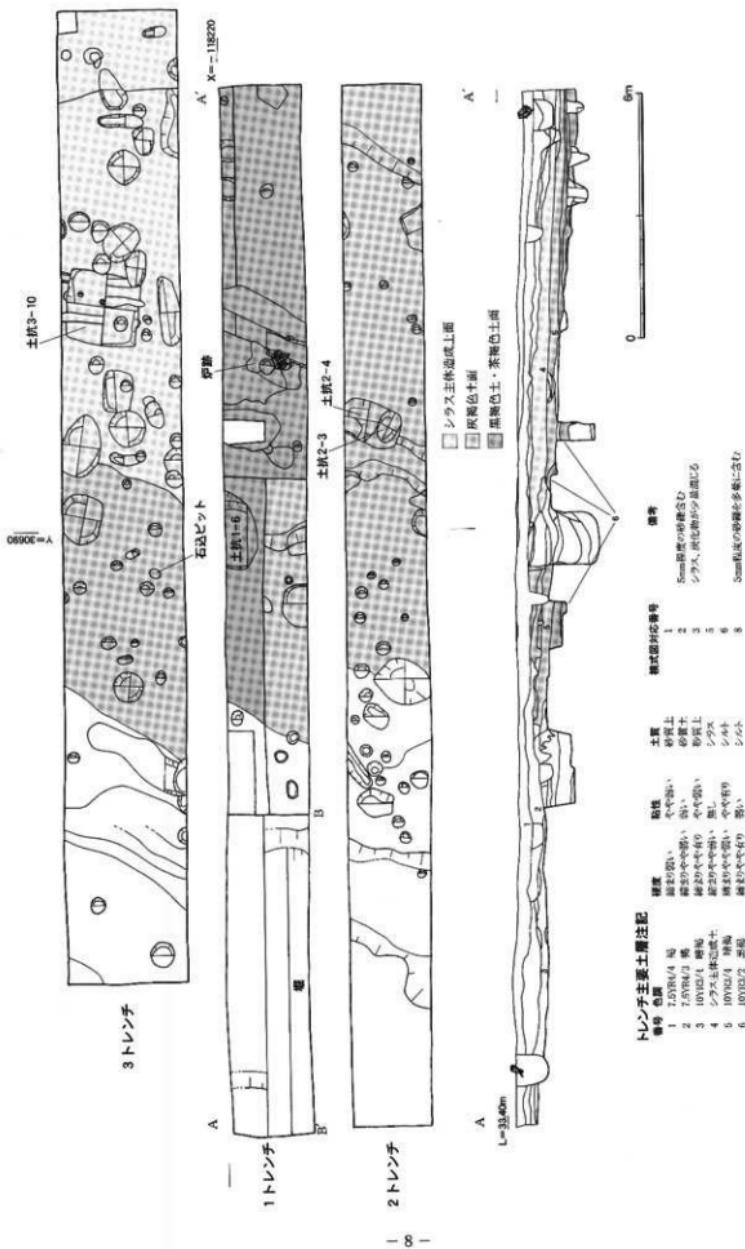
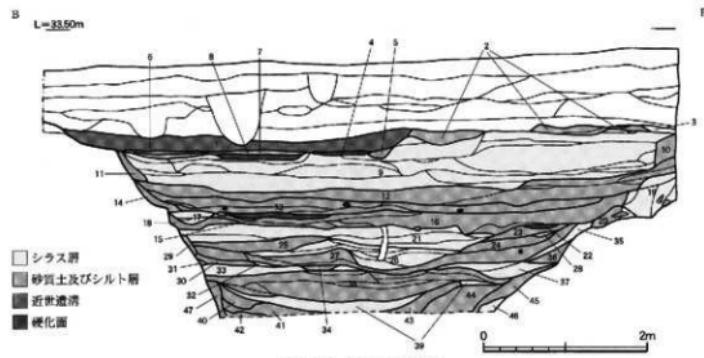


図 6 図書20冊収容区全体図及び1トレンチ主層断面図

**堀（第7図）** トレンチ西側の造成上下において検出された。堀が掘削された遺構面は、近世の遺構によって削平されていたため不明である。また遺構と遺構面の保存を優先し、サブトレンチでの調査としたが、掘削深度が2mに達した段階でこれ以上の掘削は危険が伴うと判断、掘り下げを断念したために堀底は検出できなかった。また堀の西側の肩も、トレンチ外へと伸びているため未確定であるが、東側の肩からトレンチ壁までの幅でも7.6mを測る。仮に西側の肩が上段の曲輪17からの法面をそのまま利用していたと想定すると約9mに達する。東壁は約65°の角度で直線的に立ち上がるのに対し、西壁は約40°と大きな違いがある。堀としての機能を考えると西壁の角度では緩過ぎ、西壁はシラスで構成されていることを鑑みると、崩落したシラス層で掘り下げを止めてしまった可能性がある。西壁で検出したシラスは、曲輪17への法面で露出しているやや硬質な白色シラスと同一のものであったが、それが崩落し堆積していたことが考えられる。

堀に堆積していた埋土はシラスとシルト質土の大きく2つに分類でき、それが互層になって堆積していることから、堀は人為的に埋め戻されたと考えられる。2つの土層はさらに細分が可能であり、この土層の差は作業単位を表しているものと想定できる。また、部分的に硬く叩き締められた層が確認され、非常に丁寧に埋められたことがわかる。これは堀を埋めた後に、その上部をなんらかの空間（日常生活の）として利用しようという意識の現われと考えられる。同様の互層状の埋め戻し状況は、県内では都城市の都之城中之城の堀土層構において確認されている。

遺物は青磁片、土器器片が出土しているが、細片のため時期ははつきりしない。堀を切っていいる近世の遺構からは16世紀代の備前焼播鉢、詳細な時期は不明であるが、近世磁器が出土しており、埋められた時期はそれ以前と考えられる。



第7図 堀土層断面図

#### 堀土層断面図注記

番号	色調	硬度	粘性	土質	備考
1	10YR3/4 灰褐色	硬	やや有り	シルト	5cm以下の2次堆積アカホヤブコックシ土含む
2	10YR4/8 暗	硬	やや有り	砂質土	
3	2.5YR1/2 淡白	硬	無	シラス	
4	10YR3/2 灰暗	硬	やや有り	砂質土	1cm程度の2次堆積アカホヤブコック層に含む
5	10YR3/4 灰暗	硬	やや有り	砂質土	3~5cmの層を含む
6	10YR5/4 にぶい黄褐色	硬	やや有り	砂質土	
7	10YR5/4 にぶい黄褐色	硬	やや有り	砂質土	黒色ローム層に含む
8	10YR6/2 黄褐色	硬	無	シラス	
9	10YR6/4 にぶい黄褐色	硬	無	シラス	シラス層にシルトが互層状に混じる 互層の単位は1~2cm程度、砂を含む
10	10YR1/4 灰	硬	やや有り	砂質土	

11	10VR3/3	堆積	盛土より有り	有り	シルト	地元ローム層の廃土
12	10VR5/4	にぶい黄褐色	盛土より有り	やや弱い	砂質土	褐色ラムブロック含む
13	10VR3/4	暗褐色	盛土より有り	やや有り	砂質土	黑色ロームブロック、シラスブロック含む
14	10VR3/3	にぶい黄褐色	盛土より有り	やや弱い	砂質土	1cm程度の褐色ラムブロック少量含む
15	10VR4/3	にぶい黄褐色	弱い	やや弱い	砂質土	褐色粒子、鉄分含む
16	10VR4/6	褐色	盛土よりやや弱い	やや有り	砂質土	
17	2.5YR1/2	灰白	盛土より弱い	無し	シラス	
18	10VR3/4	暗褐色	盛土よりやや弱い	やや有り	砂質土	
19	2.5YR1/3	淡黄	盛土よりやや弱い	無し	シラス	
20	10VR1/4	褐	盛土よりやや弱い	やや有り	砂質土	
21	10VR7/2	灰黃	盛土より弱い	無し	シラス	
22	10VR1/6	褐	弱い	有り	砂質土	
23	10VR4/3	にぶい黄褐色	盛土よりやや弱い	やや有り	砂質土	5cm以下シラスブロック含む
24	10VR4/4	褐	盛土よりやや弱い	やや有り	砂質土	5cm以下のラムブロック含む
25	10VR1/6	褐	盛土よりやや弱い	やや弱い	砂質土	
26	10VR7/3	にぶい黄褐色	盛土より弱い	無し	シラス	
27	10VR5/4	にぶい黄褐色	盛土よりやや弱い	やや有り	砂質土	
28	10VR7/3	にぶい黄褐色	盛土より弱い	無し	シラス	
29	10VR3/4	暗褐色	盛土より有り	やや有り	シルト	
30	10VR4/1	褐	盛土よりやや弱い	やや有り	砂質土	
31	10VR3/1	地盤	盛土より弱い	無し	シルト	白シラス含む
32	10VR6/4	にぶい黄褐色	盛土よりやや弱い	やや有り	シラス	
33	2.5YR1/2	灰白	盛土より有り	無し	シラス	
34	10VR4/6	褐	盛土よりやや弱い	無し	シルト	
35	10VR7/4	にぶい黄褐色	盛土よりやや弱い	無し	シラス	
36	10VR6/1	にぶい黄褐色	盛土よりやや弱い	やや弱い	砂質土	
37	2.5YR1/1	灰白	盛土よりやや弱い	無し	シラス	
38	10VR4/3	にぶい黄褐色	盛土より有り	やや弱い	砂質土	
39	10VR7/3	にぶい黄褐色	盛土よりやや弱い	無し	シラス	
40	10VR4/2	灰褐色	盛土よりやや弱い	やや有り	シルト	
41	10VR6/1	にぶい黄褐色	盛土よりやや弱い	弱い	シラス	
42	10VR4/4	褐	盛土よりやや弱い	やや有り	シルト	
43	10VR4/4	褐	盛土よりやや弱い	やや有り	砂質土	
44	10VR1/1	褐	盛土よりやや弱い	やや有り	砂質土	
45	10VR4/4	褐	盛土よりやや弱い	やや弱い	砂質土	
46	2.5YR1/1	灰白	盛土よりやや弱い	無し	シラス	
47	10VR5/4	にぶい黄褐色	盛土よりやや弱い	やや有り	シルト	

## 20-2 トレンチ

2 トレンチは、造成土面、灰褐色土面の調査を行った。やはり造成土面でピットが見られるが、1 トレンチと同様に規則性は捉えられず掘立柱建物等の検出には至らなかった。

灰褐色土面においてはトレンチの中央東寄りで高低差約 0.4m の段を検出した。1 トレンチにおいてもスロープ状の段差を検出していたが、2 トレンチでは段の途中に幅約 0.5m の平坦面を持つ明瞭な段となっていた。これは曲輪内の区画と考えられ、造成以前は、曲輪内を段によって立体的に区画を行い利用していたことが明らかとなった。

**土坑 2-3、土坑 2-4** トレンチの中央東寄りにおいて、灰褐色土面で検出された。土坑 2-3 は平面橢円形で、長軸 0.8m、短軸 0.5m、深さ 0.3m、土坑 2-4 はやはり平面橢円形を呈し、長軸 1.5m、短軸 1m、深さ 0.9m を測り、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。土坑 2-4 を土坑 2-3 が切る形となるが、土坑 2-3 の埋土はほとんどが造成土で構成されていた。このことから土坑 2-3 は造成の直前に掘り込まれ、埋め戻しは成されなかつたことがわかる。また土坑 2-3 を掘り込んだ時の廃土が土坑 2-4 の上に置かれた状況が検出された。遺物は土坑 2-4 から、土師器細片、混入と思われる弥生土器片、条痕文土器片が出土している。

## 20-3 トレンチ

3 トレンチは造成土面までの調査に止めた。造成土上では、他のトレンチと同様に土坑、ピットが検出されたが、ピットに規則性はなく掘立柱建物の検出には至らなかった。3 トレンチの特徴としては、他のトレンチに比べ土坑が多い点が挙げられる。

**土坑 3-10** トレンチの中央東寄りにおいて、シラス主体造成土面で検出された。平面形は正方形に近い形を呈し、南北約 1.8m、東西約 1.7m、深さは約 0.6m を測る。壁面は垂直に近い角度で立ち上がり、埋土には焼土塊、粘土塊が含まれている。遺物は土師器片、青磁片、白磁片、欠損があるが洪武通寶が出土した。遺構の形態から小形の竪穴建物の可能性もある。

**石込ピット** トレンチの中央東寄りで灰褐色土面において検出された。ピットは直径約 0.25m、深さは半裁したものの、石とピット壁との間隔があまりに狭く、遺構保存を優先したため底面が検出できていない。石はピット下部では壁面に接するような形で込められているが、上

部になるとピット壁との間に5~8cm程度の隙間が見られる。石が10cm以下と小形であることや検出面からすでに石が確認できること、周囲のピットとは埋土の色が異なることから柱穴の根固め石とは考え難い。遺物は土師器細片が出土している。

#### 第IV章 総括

今回の調査の目的は、曲輪20で確認されると想定された、穆佐城においても初期段階にあたる南北朝期の遺構の確認とその具体的な内容の把握にあった。ここでは整理作業の途中ではあるが、調査内容をまとめ総括としたい。

穆佐城の存続期間は約280年と長期に渡っているが、曲輪20においても複数の時期の遺構、遺構面が確認された。今回調査を行った遺構面で最も古いものは前述の通り黒褐色土面である。

黒褐色土面においては炉跡、ピットが検出されたが、黒褐色土面まで掘り下げた面積が狭いため、遺構分布の全容は明らかではない。ただし、前述の遺構が検出されているほか、土師器皿、壺などの遺物も出土しており、生活面として利用されていたことは間違いない。その時期は、上層の灰褐色土に包含される遺物の時期が、現状では15世紀前半と考えられるため、それを下限とする時期であると想定される。

次の遺構面である灰褐色土面では、土坑、ピット、曲輪内の段を検出した。この中でも曲輪内の段は、現地表面では平坦に見える曲輪の地形が、この時期においては、段によって曲輪を区画して利用していたことが明らかとなった。ただし上段、下段ともに類似する状況でピットが検出されており、上下段による性格の差は明確には見出せない。灰褐色土面の時期は包含する遺物の時期である15世紀前半以降ということになる。

さらに上層のシラス主体造成土面では、土坑、ピット、溝状遺構が検出された。特に3トレンドでは、他のトレンドに比べ多くの土坑が検出された。その中で土坑3-10は、形態から小形の竪穴建物である可能性があるが、常住するには規模が小さすぎ、その性格の検討が必要である。シラス主体造成土の時期は、灰褐色土上面において、造成土によってパックされていた土器群の時期から大きく遅れることはない。しかしその中には古代の須恵器壺が含まれており、遺物の時期幅が大きい。この須恵器壺は、口縁部に煤が付着しており後世の転用品の可能性もあり、また他にも古代の遺物と考えられる細片が見られることから混入の可能性も考えられる。

鍵となる遺物は、完形かつ正位で出土した2点の土師器小皿である。小皿は系切底で、口縁部径は共に約9cmで、小皿の範疇では大形の部類に含まれる。隣接する都城盆地の編年を見ると、12世紀前半から中頃をピークに徐々に口縁部径が縮小していく傾向にある。9cmという値は12世紀末頃となり、15世紀代のものを含む共伴遺物と齋船がある。穆佐城跡が所在する官崎平野では都城盆地とは異なる傾向を辿る可能性が高く、編年を含め今後の検討が必要である。

遺構の中で特に注目されるものは、調査区西端で検出された堀である。この堀は、曲輪20から、主郭である曲輪7へ向かう通路の障害としての機能が想定できる（堀底を通路としていた可能性もある）。その堀を精緻に埋め、平坦面を形成する行為は大規模な城構造の改変である。同様に東側の造成も、曲輪内の段を埋め、一つの広い平坦面を作成した点では共通の意図が読み取れ、両者は同時期に成された可能性が高い。ただし、造成後にその目的を表すような遺構（大規模な掘立柱建物など）が確認されていない点には疑問が残る。

南北朝期の遺構の確認と内容の把握という目的は、上層において穆佐城存続時期の遺構が確認されたため、果たせなかつた部分も多い。しかし曲輪20は、丁寧な造成を繰り返し行ながら、少なくとも3つの時期において生活面として活用されていたということが明らかとなつた。

整理作業途中で不明確な部分も多いが、今後詳細な検討を行い明らかにしていきたい。

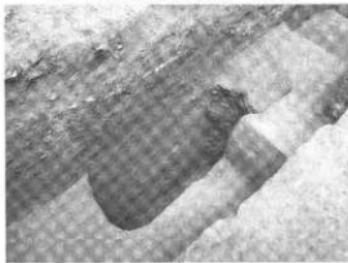
図版 1



1. 1 トレンチ全景 -東より-



2. 1 トレンチ土層堆積状況 -南東より-



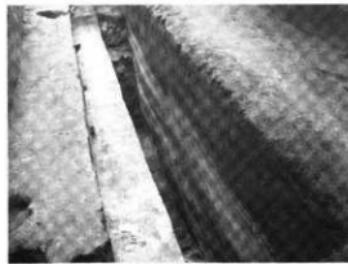
3. 1 トレンチ 土坑 1-6 -南西より-



6. 2 トレンチ全景 -東より-



4. 1 トレンチ 炉跡 -北東より-



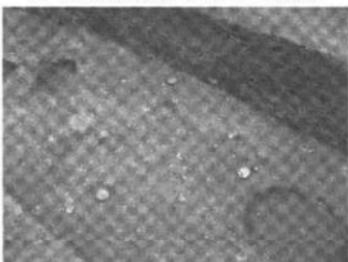
5. 1 トレンチ 堀土層堆積状況 -西より-



1. 2 レンチ曲輪内段 一東より一



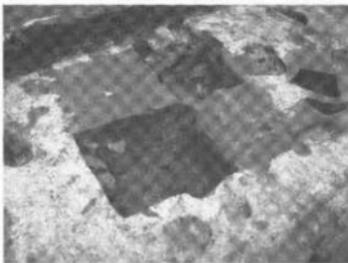
2. 2 レンチ土坑 2-3・2-4 一北東より一



3. 2 レンチ造成土直下遺物出土状況 一北西より一



4. 3 レンチ全景 一東より一



5. 3 レンチ土坑 3-10 一南より一



6. 3 レンチ石込ビット 一東より一

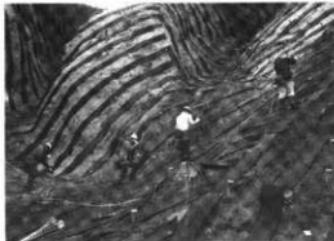
## 附章 法面保存修復工事

20年以上前から法面が大きく崩落しているC地区北側斜面の一部について、近年になり、さらに崩落・侵食が進んでいることにより、保存整備専門委員会の協議・指導を踏まえ、平成18年度に法面保存修復工事を実施した。工法については、穆佐城跡保存整備基本計画（平成16年3月策定）において検討された工法で、史跡の形状に合わせて施工することができ、急斜面でも高い安定度が得られるジオファイバー工法を採用した。その内容について概略紹介する。

### 工事概要

1. 準備工  
伐採・除根
2. 土工  
崩落土を人力工によって除去し、土砂を運搬。
3. 水路工  
法面上部に皿型側溝を設けて集水し、暗渠によって縦排水を行う。
4. ジオファイバー工
  - ① 鉄筋補強工  
地山内にアンカープレートを埋め込み、地山の抵抗値を高める。
  - ② 連続繊維補強土工  
砂質土とポリエステルを混合させた土構造物を構築。補強度厚=20cm。
  - ③ 植生工  
補強土にラス張を施し、表面に植生基材を吹き付ける。

図版3



1. アンカーの打設作業(鉄筋補強工)



2. 补強土吹付作業(連続繊維補強土工)



3. 植生基材吹付作業(植生工)



4. ジオファイバー工完成状況

# 報告書抄録

ふりがな	しせき むかさじょうあと						
書名	史跡 穂佐城跡						
副書名	穆佐城跡保存整備に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書						
卷次	III						
シリーズ名	宮崎市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第67集						
編集者名	石村 友規						
発行機関	宮崎市教育委員会						
所在地	〒880-0805 宮崎市橋通東1丁目14番20号						
発行年月日	2008年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積
みやざきけん 宮崎市 たかおかちょう 小山田 940-1	45201			31° 56' 00"	131° 19' 32"	20070312 ～20070329	176m <sup>2</sup>
付近	付近					20071009	
						～20080318	
調査原因	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
保存整備	城郭	中世 近世	堀 炉跡 土坑 溝状遺構	十脚器皿・坪 束縛系鋤鉢 青磁・白磁 円底陶器壺・擂鉢(偏前) 鉄滓			

宮崎市文化財調査報告書 第67集

## 史跡 穂佐城跡

穆佐城跡保存整備に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書(III)

2008年3月  
発行 宮崎市教育委員会